

奏



大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
Osaka International Chamber Music Competition & Festa

大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
Osaka International Chamber Music Competition & Festa



第9回
大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
〈特集号〉

公益財団法人 日本室内楽振興財団

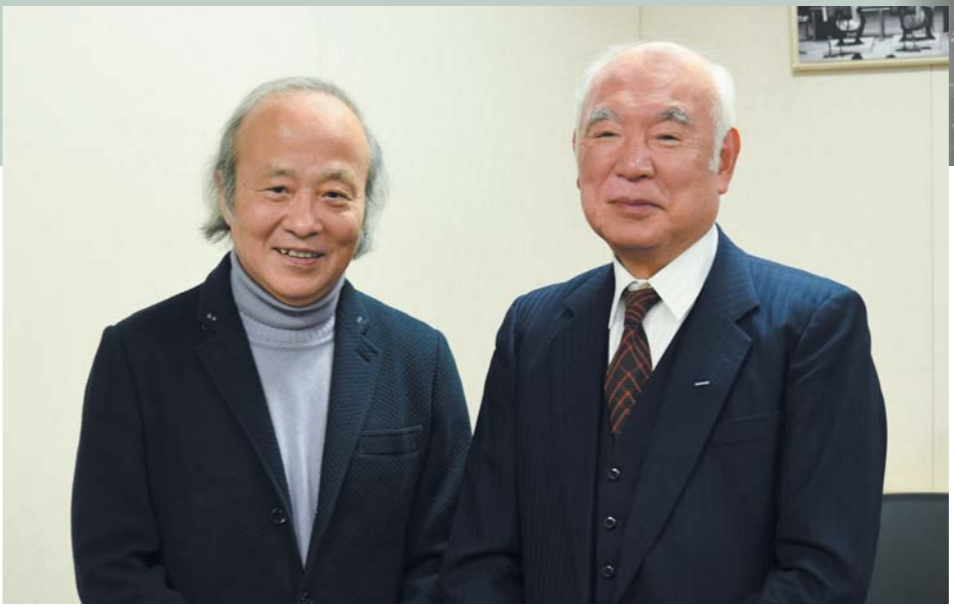
2017 SPRING Vol.47



サントリーホール

インタビュー

「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催によって、さらにクラシック音楽界が盛り上がり、日本全体の活性化につながる事ができれば素晴らしい！」



左:尾高忠明さん 右:堤剛さん

いよいよ開催が目前に迫った「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」。このコンクールにおいて審査委員長を務められる世界的チェリストの堤剛氏と、この春から大阪フィルハーモニー交響楽団のミュージックアドバイザーとなられ、来年には音楽監督に就任される指揮者の尾高忠明氏のお二人にお話を伺うことに。日本室内楽振興財団の常務理事、牧野立太氏がサントリーホールの館長室を訪ね、室内楽の魅力やそれぞれの交流、コンクールへの思いなどをお聞きして大いに盛り上がりました。

齋藤秀雄先生は生徒が上手くなるためには、全てを捧げるというのが根本的部分にあります。たね。——尾高

牧野 本日はお忙しい中、誠に有難うございます。早速ですが、堤さんと尾高さんは、同じ桐朋学園出身で齋藤門下生だったとお伺いしていますか？

尾高 そうです。堤さん

は大先輩で憧れの存在でした。堤 有難うございます。音楽界に齋藤先生の門下生は多く、素晴らしいばかりです。



堤さん

尾高 齋藤先生はチェロと指揮をなさっていて、その二部門は素晴らしい生徒が育っています。特にチェロ部門では、堤さんを筆頭に、世界で名だたる先鋭

チェリストの多くが在籍しておられました。堤さんがNHK交響楽団と初めて世界旅行をされた時、日本人として誇らしい思いで眺めていました。

牧野 なるほど。齋藤先生から学ばれたことは多いですか？

尾高 齋藤先生無くして私にはありません。厳しい先生でしたが、様々なことを教えていただきました。卒業時、先生に呼ばれて井上道義と一緒に会いに行きました。つぎ卒業祝いのお言葉をいただけるのだ

と思つたら、「君たち二十二、三歳では、音楽は全然わかっていないと思う。三十歳まで仕事はないだろうけど、三十歳になれりうから、ジャズでもポップスでも歌謡曲でも何でもいりから指揮をしない。四十歳になつたら反省を繰り返してさらに練習しなさい。そうすれば、五十歳で初めて指揮者の赤ちゃんとされる」と、そんなお言葉をいただきました(笑)。その後三十歳になり四十歳になった時、先生がおっしゃった通りだとわかりました。だから、五十歳になるのは怖かった。指揮者として、スタートを切るわけですからね。今年七十歳になるので、指揮者としてはやっと二十歳(笑)。そうした齋藤先生の教えはずっと消えない。本当にすごい人です。

堤 私は小学校三年生からずっと齋藤先生に教えていただいていた。その当時からとて「生懸命教えてくださって、知つていることを全部教えていただいたように思います。ただ、その頃はまだ幼くてわからない



尾高さん

ことも多かったのですが、後になつて、先生がおっしゃっていたのは、こういうことだったのかと改めて思うことが多々あります。よく怒られたし、厳しい先生でしたが、それでもついていけたのは、先生の情熱に惹かれたというか…。

尾高 情熱プラス愛情があつて、生徒が上手くなるためには、全てを捧げるといのが根本的部分にあります。たね。

牧野 なるほど。

尾高 先生とのアメリカ旅行を計画していた時、先生の病気が発覚し、余命三カ月と聞いて、旅行をキャンセルしたのですが、先生は行く気満々だった。合宿も参加されるつもりで、「遠方だから私たちに任せてください」とお話ししたのですが「ダメだ！合宿は大事だ！お前には任せられない」と。仕方ないから「それでは場所を近場に変更して合宿をしましょう。

それなら病院も近い」と提案すると「ダメだ！あの空気のいい場所で温泉に浸かり、美味いものを食べるという環境の中で、子ども達に教えるのが合宿なんだから」と言つて引かない。説得に説得を重ねてなんとか辞退していただきましたが、結局それは先生の最後の嘘でした…。

牧野 嘘といえますか？

尾高 私たちが合宿所に到着した時、齋藤先生がこちらに向かつているという連絡があつたんです。夜中に到着されたのですが、腹水で腹部が異常に腫れた状態で、翌朝には帰つていただくことと皆で話し合つていたので、翌朝、奇跡的に元気になるので「指揮をする！」と。全員で驚いて止めたのですが「俺はやる！」と歩も引かない。仕方がないので、車椅子を指揮台にして、モーターとチャイコフスキーを指揮していただきました。チャイコフスキーを指揮する時には手を上げることができなくて、子ども達に「手が上がらなくて申し訳ない」と謝るんですよ。そんな状態で五



牧野さん

尾高 「人間としてしっかりせよ！」ともよく言われた。「素晴らしい音楽家・演奏家である前に、素晴らしい人間であれ」と。先生自身ヘビースモーカーでしたが、合奏室では絶対に吸わないと、しっかりけじめを守つてらっしゃいましたね。

堤 先生の自宅でレッスンを受けていたのですが、くわえ煙草

PROFILE 敬称略

【**牧野 立太**】(インタビュー) 公益財団法人日本室内楽振興財団 常務理事

【**堤 剛**】(チェロ) 名実ともに日本を代表するチェリスト。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ齋藤秀雄に師事。1961年アメリカンインディアナ大学に留学、ヤーノシュ・シュタルケルに師事。1963年ミュンヘン国際コンクール第2位、カザルス国際コンクール第1位入賞。2009年秋の紫綬褒章を受章。2013年、文化功労者に選出。(パッパ無伴奏チェロ組曲全曲)など録音多数。1988年より2006年までインディアナ大学の教授を務め、2004年より2013年まで桐朋学園大学学長を務めた。2007年9月、サントリーホール館長に就任。

【**尾高 忠明**】(指揮者) 現在NHK響正指揮者、BBCウェールズ・ナショナル管絃指揮者、札幌響名誉音楽監督、東京フィル桂冠指揮者、読売日響名誉客演指揮者、紀尾井シフォニエッタ東京桂冠名誉指揮者を務める世界的指揮者。91年度サントリー音楽賞受賞。97年英国エリザベス女王より大英勳章CBEを、99年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与された。2012年有馬賞(NHK交響楽団)、14年北海道文化賞受賞。東京藝術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学客員教授、国立音楽大学招聘教授。

でチェロを弾かれるので、ポタポタと灰が落ちる。それがチェロのf字孔のところに入っていくんですね。チェロが焦げるのではないかとヒヤヒヤして見てましたよ(笑)。その後、先生がチェロを調整に出された時、楽器店の方がチェロをひっくり返すと灰がポロポロ出てきた(笑)。それでみんな「このチェロは灰が入っていた方が良い音がしていたね」と冗談言って笑い合いました(笑)。そんなユニークな逸話も残っています。

尾高 その後、チェロと指揮だけではダメだとオーケストラも教えてくださるようになり、民音が指揮者コンクールを始めた時には、声楽と室内楽の教育も始められた…。

牧野 そのように音楽の世界



ニ交響楽団と尾高大阪フィルハーモニー交響楽団は自ずと変わりますよね。

尾高 もちろんそうです。指揮者によって変化しますが、朝比奈隆さんというDNAは必ず残る。例えば、NHK交響楽団であれば、NHKの放送局としてのDNAがありますよね。大阪フィルハーモニー交響楽団は、私が十年続けたとしても、どこかに必ず朝比奈先生のDNAを感じるでしょうね。

牧野 そうですね、生まれ落ちたときのDNAが一番影響力が強いと思います。人は変わってもDNAはちゃんと残っている。オーケストラはそういうものなのでしょうね。

堤 DNAという点では、NHK交響楽団は、尾高さんの

を広げていかれたのですね。

海外で学んだことを日本で教え、音楽レベルを上げる流れを作っておられる。——**牧野**

牧野 ところで、お二人はチェリストと指揮者と、違った道を歩まれたわけですが、ご一緒されることは多かったですか？

堤 もちろん、いろいろとご一緒させていただいています。東京フィルハーモニー交響楽団が世界旅行をした時や、パリでの武満徹のコンチェルトの世界初演やチェコで二緒したりと…。

尾高 相愛のオーケストラもご一緒していただきましたしね。二緒していただけますね。

堤 そうですね。いろいろな演奏で二緒していますね。

牧野 尾高さんは毎年年末にチャリティーコンサートを開催されるそうですが…。

尾高 知的障害の子どもたちを支援する家内の親友が「音楽を聴かせると情緒的にとっても良い」と話していたので、私たちも何かしようと考えて十年ほど前から、家内がピアノ、兄が作曲とピアノ、兄嫁が歌を担当

お父様の影響が非常に強いと思いますよ。「尾高賞」というお名前も残っています。それは本当に素晴らしいことですね。

尾高 父は私が三歳の頃に亡くなりましたから、何も覚えていませんが、NHK交響楽団の楽員さんが、よく父の話を聞かせてくださいました。先ほどの齋藤先生は、私が桐朋学園に入学するまで、たまに父の話をしてくださっていたのですが、私の入学が決まると、死ぬまで一切、父の話はされませんでした。他の先生から聞いたのが「七光りを味わわせるな」とおっしゃっていたそうです。

牧野 それも愛情ですね。

堤 「最近日本の音楽界は先生方のおかげでレベルが非常に上がりましたね」と齋藤先生に言ったことがあるのですが、その時「日本の音楽界が本当に素晴らしいのは、今の若い人たちが留学して得たものを日本に持ち帰り、教えるようになって初めて本当に素晴らしいものになる」とおっしゃいました。そうした長いスパンで物事を考える方なのだと感じましたね。

当し、有志の友人たちと共にコンサートを開催するようになりました。堤さんの奥様が来られた時「主人にも参加させたい」とおっしゃってください、チェロ協会会長である堤さんと副会長の堀了介さん、堀さんの娘さんの三名が参加してくださった。素晴らしいコンサートとなったこともあり。お客様も絶賛でした。

牧野 そんなおつきあいがあったんですね。ところで、尾高さんは今年四月から、大阪フィルハーモニー交響楽団のミュージックアドバイザーとなられ、いよいよ来年からは音楽監督に就任される予定ですが、親友の井上道義さんからのパトントンタッチ就任でもありますが、何か特別な思いはありますか？

尾高 大阪は大好きな街です。相愛学園にも教えに行っていますし、家内は昔屋出身ですから、もともと関西とは縁があるように思います。大阪フィルハーモニー交響楽団というと、私にとつては朝比奈隆先生の印象が強い。個人的にも様々なこと

牧野 お二人はまさしく、海外で学んだことを日本で教えておられますから、そういう流れができてきますよね。

尾高 クラシック音楽が発展した時、日本は鎖国中でした。欧米人のレベルがどんどん上がっている時に、ゼロから始めなくてはならなかったのはリスクだったと思います。

お互いを聴き合う、あるいは話し合うような部分が魅力のひとつ。——**堤**

牧野 ところでお二人は、室内楽は、どのようなものだと捉えておられますか？

尾高 クラシック音楽には、ピアノやトリオ、クアルテット、オーケストラ、オペラなどがあります。でもやはり、音楽の原点はクアルテットだと思うんですね。ウィーンフィルの人と話す時「我々がすごいのは何組でもストリング・クアルテットができることだ」と言います。それはどのオーケストラにとっても基本で、オーケストラの根幹には室内楽があることが絶大だ

を教えてくださいました。大阪フィルハーモニー交響楽団をゼロから作り、素晴らしいオーケストラに育てられた功績は見事だと思います。毎年必ず一度は指揮に行き、昨年三月にも参加してラフマニノフの二番を指揮しました。その時の大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏が秀逸で、さすが関西の老舗オーケストラは違うと感心しました。親友である井上道義が、これからもどんどん引張っていかれると思っていれば、辞めると聞いて驚いた。そして私に引き継ぎの話がやってきて、さらに驚きました。せっかくお話をいただいたのですが、二〇一七年のスケジュールはすでに決まっていたため、来年の就任となり、音楽監督就任までの間は、音楽のアドバイザーを担わせていただくことに。朝比奈先生が作られたオーケストラを、親友から受け継ぐことに関しては、いまだ怖さもあるのですが、指揮者としてそろそろ二十歳を迎え、すし、できるだけのことをやってみたいと思っています。

牧野 井上大阪フィルハーモ

と思います。そうした場合、指揮者がなくてもできるんですよ。シェーンベルクの「浄夜」は、六十名の大編成で演奏する濃密で官能的な曲なのですが、それは六重奏が元になっています。田中千香士先生とご一緒した時にNHK交響楽団のオリジナルの六人で演奏してみたいとおっしゃって、実際にやってみました。すると「浄夜」の厳しさが前面に出てきて感動的な演奏になったんです。やはりオーケストラの原点は室内楽だと感じましたね。

堤 弦楽四重奏も室内楽も、まずはスコアを勉強しなくてはいけない。自分のパートだけ弾けてもどうしようもないですからね。自分が弾いている時、他のパートの人がどうしているのかを探るといって聴く姿勢が非常に重要です。最近の日本のオーケストラは本当に素晴らしいけれど、ウィーンフィルやベルリンフィルと違うのは、彼らは室内楽をちゃんと聴いて創ることができていることなんだと思います。だから、指揮者がインスパイアすると、スツとできる。そ

んな時に管楽器の音程が合うというの、やはり室内楽を経験していないとできないと思います。最近では日本のオーケストラも室内楽に力を入れ始め、そういう意味では非常に良くなってきました。ただ、ヨーロッパのオーケストラと比べると「聴いて創る」という部分が弱いと思いますね。

牧野 堤さんはこのサントリートホールで室内楽アカデミーを実施しておられますが、それはどのような部分が大それたこととおられるからですか？

堤 そうですね。やはり音楽事情が熟成していくにつれ、原点となってくるのは室内楽ではないかと感じます。

牧野 お互いを聴き合う、あるいは話し合うような部分の魅力のひとつなのでしょうね。

堤 私は小学四年生から桐朋学園のプレスクールのような教室に入ったのですが、オーケストラに入ると同時に室内楽も学びました。チェロのソロも習いましたが、とにかくアンサンブルを叩き込まれました。先生方はいかに室内楽が面白いかを教

えてくださったので、室内楽は面白いという印象が強くなりましたね。

コンクールは、いつも到達点ではなく、出発点だったと考えていました。——堤

牧野 我々が五月に開催する「第九回室内楽コンクール&フェスタ」において、堤さんには審査委員長を務めていただいております、尾高さんも国内外のコンクールで審査員をされていますが、コンクールに関しては、どのようなお考えがあるのでしょうか？

堤 私はいつも受ける人たちに「コンクールは自分に対するチャレンジだ」と話しています。いかに自分を伸ばせるかが課題だと考えますが、室内楽においては、自分だけでなく、互いに力を合わせて演奏する曲を、どこまでレベルアップできるかと努力することで、より豊かなものが生まれるのではないかと期待しますね。

尾高 コンクールは必要だと思います。必要だけでも、結果で合せているだけではなく、その人がどのような音楽を弾こうとしているのかを見極め、それとどう協調していくかを考えられるというオーケストラの素晴らしさは、測り知れないものがありますね。

牧野 そうですね。

尾高 ある演奏会で二緒したオーボエのガブリエルさんとお話をしていた時に「イタリア人指揮でオペラをするのは良いね」というと「でもね、二幕である指揮者はこう振った。あれはドラマからいくとおかしいんだ」と言うわけです。指揮者が見過ごしている部分を、演奏しているメンバーが見極めていく。すごいなあと感じしましたよ。

牧野 室内楽のように、ちゃんと音を聴き合っているというわけですね。

尾高 日本の室内楽やオーケストラは、もともとヨーロッパのお客様の前で演奏する機会があった方が良く思うし、日本の指揮者も外国の指揮者からものと刺激を受けるべきだと思いますね。

は必ずしも正しいわけではないように思う。例えば、世界中のコンクールで一位になった人が活躍している、入選の人が活躍していないかという点、一概には言えない。あくまで人間が判断するものだし、その後その人自身がどう伸びていくかで変わっていくと思いますね。



牧野 なるほど。

尾高 昔はオペラ座に入ってから何年も修行してから徐々に踏み出していくのが二つの道で、それ以外の方法はほとんどなかった。カラヤンコンクールなどが開催されるようになって、今や世界中のオペラハウスではコンクール出身の人がほとんど。どちらが良いかはわかりませんが、問題はコンクールの審査員構成だと思えます。だからこそ、コンクールは審査員選びが難しい。指揮コンクールの場合は、あの素晴らしい音楽は、

震災後、大阪国際室内楽コンクール&フェスタを開催した大阪の力には感激しました。——堤

牧野 ところで、尾高さんはミュージックナドヴァイザー就任と同時に、関西に居を構えるそうですが…

尾高 オーケストラのメンバーと同じ原点に立って、共に仕事をしたいという思いがあるんです。

牧野 尾高さんも関西に来られますし、「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」も開催されますし、春は音楽シーンに良い刺激があるように思えますね。

堤 その大阪国際室内楽コンクール&フェスタで一番感激したのは二〇二二年のこと。震災直後にも関わらず開催しましたよね。参加者もほぼ開催はあきらめていたのに、なんとか開催した大阪の力には感激しましたね。

尾高 あの年は本当に大変でした。ちょうど私は新国立劇場の監督だったのですが、翌日から続々とキャンセルになって

あの指揮者によるものか、もしくはオーケストラによるものなのかという判断も非常に難しいですね。

牧野 コンクールは、ひとつのきっかけになるでしょうね。

堤 そうですね。若い頃、よくコンクールを受けましたが、そこはいつも到達点ではなく、出発点だったと考えていました。

牧野 そうした出発点から、音楽は様々な形に発展してくんできますね。

留学生活の経験は、人間性のどこかをふくよかにしてくれるように思う。——尾高

堤 尾高さんはウィーンに留学して様々なことを学ばれましたが、成長するためには、そのように脳を活性化するのも重要なことですね。

尾高 海外に行きたかったのは、やはり父が音楽家だった影響もあると思いますが、それよりも、ウィーンという街で、食べて飲んで、あの空気の中でウィーン国立オペラを見て、ウィーンフィルを聴いて、ポーリ

ー。新日本フィルハーモニーでローゼンカパリエをする予定だったのに、指揮者や歌手は来ないし、真っ青になりました。なんとか代役を考えて、初日をケネブ口に変え、公演減らして開催しました。初日の公演を終え



た時、舞台裏で、みんな泣いていましたよ。あの時、すかさず開催を決めた大阪の考え方は理にかなっていたと思います。

牧野 そんな大阪からさらに音楽界が盛り上がり、日本全体で活性化できれば素晴らしいですね。私共のコンクールが、そうした力になればと思います。本日は有難うございました。



ニのリサイタルを聴いたという事実が大それたことだからです。留学生活での経験は、後々グッと生きてきます。どこがどうとは言えないのですが、人間のどこかがふくよかになっていくというかな…。

堤 そうですね。

尾高 ゲヴァントハウスで演奏会が始まる前、指揮者室で軽くベートーヴェンのピアノソナタを弾いてみたことがあるのですが、すごく良かった。なのに日本で弾いてみたら、そう大したことではなかった(笑)。そんなものなのかもしれませんね。

堤 そうですよ。

尾高 ウィーンフィルがすごいのは、そうした環境と、チェコ人、ハンガリー人、生粋のオーストリア人と、異民族が集まって、互いの弾く音楽をよく聴きながら素晴らしい音楽を奏でるという点ですね。ただ音を聴い

金管五重奏の歴史とその魅力



佐伯 茂樹 (さえき しげき)

〈プロフィール〉

音楽評論家、古楽器奏者。クラシカル・プレイヤーズ東京など古楽器オーケストラで演奏活動をしている。音楽の友、レコード芸術、バンドジャーナルなどで執筆。著書多数。元東京藝術大学非常勤講師。レコードアカデミー賞選定委員。

管五重奏とサクソフォン四重奏の歴史と魅力についてご紹介してきましたが、最終回の今回は、金管五重奏の歴史と魅力についてお話ししていくことにしましょう。

いよいよ、五月に開催される第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの開催が近づいてきました。今年は、六年ぶりに第二部門が管楽アンサンブル部門になります。これまでに、管楽アンサンブル部門で競われる三つの形態の中から、木

を吹く形で書かれており、新しい金管楽器のプロモーション用に演奏されたようです。

次に、金管五重奏曲が作曲されたのは十九世紀後半のロシアでした。当時の帝政ロシアでは、皇帝が軍隊の最高司令官の地位にあり、軍隊も管轄していたことから、歴代皇帝が金管楽器を嗜んでおり、首都であるサンクトペテルブルクでは、金管楽器によるアンサンブルが盛んにおこなわれるようになったのです。とりわけ、自らコレットを吹いていたアレクサンドル三世の時代には、隣国のドイツやチェコなどから作曲家や楽器メーカーが出稼ぎに来て、サンクトペテルブルクは金管アンサンブルのメッカとして賑わいました。

その時代に生まれたのが、ロシアのアマチュア作曲家(当時のロシア人作曲家の多くはアマチュアでした)ヴィクトル・エワルド(一八六〇―一九三五)が作曲した四つの金管五重奏曲です(第四番は弦楽四重奏曲からの編曲です)。編成は、コレット二本、アルトホルン、テノールホルン、テューバというもので、いずれ

バロック時代になると、角笛を模倣した木製の管にリコーダーのような指穴を開けたコレット(現代のコレットとは別の楽器。ツィンクとも言います)二本と、アルト、テノール、バスの

三種類の大きさのトロンボーンで組んだ合奏が、都市の塔の上から時刻を知らせる短い音楽を奏でていました。十七世紀ドイツで活躍したヨハン・クリストフ・ペーテル(一六三九―一六九四)やダニエル・シュペール(一六三六―一七〇九)などの作曲家が、この編成のために短い作品を多数残しています。これが金管五重奏の元祖だと言つていいでしょう。

しかし、その後、バロック時代後期から古典派時代にかけて、コレットの人氣は衰退し、トロンボーンは教会で合唱の補強をする楽器になってしまったので、金管楽器の合奏のための作品はほとんど書かれなくなりま

した。再び、金管楽器による五重奏が書かれ始めたのは、十九世紀に、ヴァルヴ装置が発明されて、どの金管楽器も自由なメロディが演奏できるようになってからでした。

ヴァルヴ楽器を想定した近代の最初の金管五重奏曲は、フランスのヴァイオリニストで作曲家のジャン・フランソワ・ヴィクトル・ペロン(一七九五―一八六九)が、一八四八年から一八五〇年にかけて作曲した作品です。全部で十二曲あり、一九九〇年代に楽譜が発見されました。この作品は、現在の金管五重奏とは少々異なり、フリーゲルホルン(変ホ)、コレット(変ロ)、ホルン、トロンボーン、オフィクレイド(サクソフフォンのようにキーの開閉で音を変える低音金管楽器)という五種類の楽器が指定されています。前回ご紹介した木管五重奏と同じように、五種類の金管楽器が競ってメロディ

管五重奏団などがそれに続きます。当時、この編成にはオリジナルのレパートリーが無かつたので、当初は、ルネサンスやバ

ロック時代の舞曲やクリスマス・キャロルなどを編曲して演奏し



第7回大阪国際室内楽コンクール 第2部門2位の「イン・メディアス金管五重奏団」

ていたのですが、一九六二年にイギリスの作曲家マルコム・アーノルド(一九二二―二〇〇六)がニューヨーク金管五重奏団のために作曲した金管五重奏曲第一番が、現代の編成の金管五重奏

の最初の本格的なオリジナル曲になりました。

その後、一九七〇年代になると、パフォーマンズの要素を取り入れたカナディアン・プラスとエン

パイア・プラスがデビューし、クラシックやポピュラーの名曲を編曲して演奏するようになり、ます。イギリスのフリーリップ・ジョーンズ・プラスアンサンブルも金管五重奏も取り上げるようになりました。これらの団体が編曲した楽譜が世界中で出版されるようになり、金管五重奏を楽しむ人たちが急速に増えていったのです。

日本でも、東京金管五重奏団や上野の森・プラスを皮切りに、多くのプロ奏者や音大生が金管五重奏を結成して活動を始めました。カナディアン・プラスやフリーリップ・ジョーンズ・プラスアンサンブルによる比較的易しいグレードの楽譜が入手できるようになったこともあって、アマチュアや吹奏楽部の中高生もこの編成のアンサンブルを楽しむようになっています。

現在では、金管五重奏のレパートリーは、ルネサンス音楽から現代音楽まで広がり、金管楽器のアンサンブルの代表的な編成になりました。ぜひその表現力豊かな演奏をお楽しみください。

平和な祝いの日のために

—大阪国際室内楽コンクールの意義

神戸大学大学院国際文化学専攻教授

藤野 一夫

一九五八年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学専攻教授。ベルリン・自由大学国際高等研究所フェロイ。文化経済学会理事、文化政策学会副会長（公財）びわ湖ホール理事、公財神戸市民文化振興財団理事（公財）神戸文化支援基金副理事長、日本ワーグナー協会理事、専攻下ドイツ哲学思想史、音楽文化論、文化政策学、近世に「ワーグナー」友人たちへの伝言（法政大学出版局）、公共文化施設の公共性（水曜社）、「行政改革と文化創造のイニシアティブ」（美学出版、日経新聞等の音楽批評を担当）。

ホーフコンツェルト

もう四半世紀も前のこと。ハイデルベルク大学に遊学していたとき、ドイツ人の学友から「ホーフコンツェルト」を企画したので聴きに来てほしいと誘いがあつた。ドイツ語で「ホーフムジーク」は宮廷音楽を意味する。さぞかし優雅な会場で行なわれるもの、と思いきや、わたしは意表をつかれた。

案内されたのは友人の下宿の中庭だった。たしかに「ホーフ」は中庭をも意味するではないか。大家は大工さんなので、通りに面した建物の通路を抜けると、そこには資材置き場がある。ここに材木で仮設の舞台と客席がしつらえてあつた。演奏者はハイデルベルク大学の医学部を中心とした弦楽四重奏団。友人たちが手作りのケークや飲み物を持参して、三々

五々集つてきた。

ピクニック気分のかつろぎのなかで演奏が始まると、誰もが楽興の時に集中してゆく。資材置き場の中庭が精神的な響きで充たされる。建物で囲まれているため、野外なのによく響く。周囲の部屋の窓からも老若男女が顔を出して演奏を楽しんでいる。弦楽四重奏の腕前はアマチュアの域を超えていた。



リューベックの路地裏と中庭 撮影：筆者

この「ホーフコンツェルト」の光景に、わたしは室内楽の原点を見た。クラシック音楽が日常生活に何らの違和感もなく溶けこんでいた。演奏の合間には、手作りのお菓子を分かち合い、会話が弾む。青空に新緑が映え、小鳥たちのさ

えずりが心地よくこだまする。室内楽をつうじて友人や近所のひとたちが、まったく気取ることなく触れあい、心を通わせあう。中庭という日常の空間で、音楽と自然と人々が睦みあっている。なんと平和な祝いの日だろうか！

カルチャーショックだった。わたしたちは室内楽を、クラシック音楽を、あまりに堅苦しいものに、敷居の高いものにして

きてしまったのではないか。日本人は西洋音楽の受容において、間違つた制度化を行なつてきたのではないか。

ドイツ音楽の精髓としての室内楽

パリ時代のワーグナーは、ド

イツ人にとって室内楽が、いかに親密かつ内面的な音楽ジャンルであるかを『ドイツ音楽論』（二八四〇）の中で印象的に描いている。想定されている読者は、パリの社交界の音楽愛好家である。

「冬の夜、つましい部屋に父親と三人の息子たちが、丸テーブルを囲んで座っている。息子の二人はヴァイオリンを、一人はヴァイオラを、そして父親はチェロを弾くのである。聴こえてくるのは深遠で親密な弦楽四重奏曲であり、拍子をとるあの小柄な男が作曲したもの。彼は隣村の田舎教師で、その曲は芸術味豊かで美しく、心の奥底からの作品である…。」

もしみなさんがこの曲を聴いたならば、ドイツ音楽とは何であるかを知り、ドイツ人の心情（ゲミュート）とはどういうもの

かを感じる。ことだろう。あれやこれやの華やかなパッセージによつて、そこかしこのヴィルトゥオーゾに腕を揮わせ、万雷の拍手喝采に浴させることが眼目

なのではない。すべては純粹無垢であり、それゆえに高貴で崇高なのである。



弦楽四重奏用の丸テーブル

さてしかし、このすばらしい音楽家たちを大勢の聴衆の前に出させ、華やかなサロンのなかに入れるとしよう。そうすれば彼らはもはや彼らではなく、内気な恥じらいのために、目を上げることもできないだろう…。

音楽はドイツでは、社会のおよび目立たぬ最下層にまで根を張っている。あの静謐で無欲な家族のなかで、ドイツ音楽はくつろぎ、その本質を發揮している。実際、音楽は目立つための手段ではなく、魂に活気を与えるものと見なされる場所に根付いているのである。」

室内楽が拓くもの

いささか概念的になるが、日本の近代化の中で、芸術文化における公共圏と親密圏との関係づくりに失敗してきたことを、わたしたちは認めるべきだろう。公共性を「官制」、親密圏を「私事」と二面的に理解しただけでなく、両者の関係づけ、もしくは組み直しに腐心することも怠つてきたのである。

西洋音楽の普及がいぜんとして制度硬直から抜け出せないでいる原因も、この日本固有の近代化の歪みに根ざしているだろう。鹿鳴館文化と家元制度が背馳しながら奇妙に癒着しているのだ。芸術文化は趣味、道楽として「私事」にとどまつてきたために、プロの公演ですらお稽古事の発表会と見なされ公的支援の対象にならないことが多い。文化政策における公共性の意味も根拠も曖昧なために、首長の恣意によつて市民も芸術家も翻弄されてきたのである。

西洋音楽の流れにおいては、交響楽はコンサートホールで広く市民に公開される公共性の高いジャンルと見なされてきた。

他方、室内楽は家庭内やサロン

などの親密圏に根を張つてきた。とはいえ交響曲と室内楽の構造には、ソナタ形式や四楽章構成などの類似性が目立つ。

ベートーヴェンの『第九』を俟つまでもなく、交響曲は二つの共同体を結成させるパワーを持つ。たしかに室内楽という小宇宙も、その形式、内容ともに結集と総合をめざしてはいる。しかし編成上も、本質上も、室内楽は大仰な音響体を拒むのである。

ワーグナーが語つたように、室内楽はまずもつて内面性の音楽である。親密圏に根を張っている。とはいえ、室内楽の奏者たちが一種の競争状態にあることも忘れてはならない。けつして目立つためではなく、その技量と音楽性を、相互に高め合いたいと思うのは自然な欲求である。しかし、室内楽における競争は協奏であり、遊戯（シミュール）なのである。この遊戯精神によつて、現実の競争社会への批判と攻撃性の相対化が生まれるだろう。

室内楽の本質は、個々の楽器

が騒々しく自己主張することではない。共演者の演奏に熱心に耳を傾け、他者への思いやりのなかで自分の持ち前を心得えてゆく。誇示するのではなく、自制することを学ぶのである。個性の競い合いを通して調和が実現される時間。そのダイナミックな対話のプロセスに、聴衆が想像力を發揮して参加することこそ、室内楽の醍醐味と言つてよいだろう。

室内楽においても国際コンクールが必要不可欠なものであるとすれば、それはあの「平和な祝いの日」を、国境を超えて実現するチャンスだからである。インターカルチュラルな交流が刺激となつて、親密圏と公共圏の境界に、室内楽固有の領域を拓くことができるのではないか。それによつて官制文化と私事文化の硬直した関係を解きほぐし、組み直すことができるのではないか。親密圏の土壌に根ざしながら公共圏へと拓かれてゆく室内楽固有の時間と空間が生まれるのではないか。そこにあの「平和な祝いの日」が到来することに思いを馳せたい。

2016年国際弦楽四重奏コンクール総括

「ボルドー・バンフ・ミュンヘン・ジュネーヴ」

音楽ジャーナリスト
渡辺 和

去る二〇一六年、メイジャーと呼ばれる弦楽四重奏のコンクールが世界で四つも開催された。そればかりか、バンフとミュンヘンARDの日程が重なる非常事態まで勃発したのである。以下、それらの結果から見える若手弦楽四重奏団評価の潮流を駆け足で概観する。

◆ボルドーとバンフの可能性への評価

大会ラッシュの口火を切ったのは、五月二日から八日に開催されたボルドーである。二九七〇年代からジュネーヴ湖畔エヴィアンで開催されるも諸事情で中止となった大会を引き取った一九九九年の初回は、同年の第三回大阪第一部門で優勝したベルチャQが制した大会でもある。二〇〇七年からは三年毎開催が定着、ワインの街の目玉文化イベントのひとつとなった。国際大会とはいえフランス・ローカル感はあるが、今回からはレツ



オーデトリウム・ボルドー舞台上から進行を説明するフランチェスカ・ジリ国際コンサルタント。前々回までボルチアーニコンクール事務局を務めた腕を披露された。

ジョ・エミリアのボルチアーニ大会を差配していた前事務局長が国際コンサルタントに就任、真の国際大会へと脱皮しつつある。

十三もの団体が参加した大会、九団体が順当に二次予選へと駒を進めたが、四団体

に絞り込まれる本選で、前レツジョ大会で二位のムハQ、既に欧州各地の音楽祭でキャリアを積んでいるアリスQやジョーンQなど、所謂「出来上がった団体」が軒並み脱落。二〇一〇年前後結成の団体ばかりの本選となる。結果は、フランスの若手アキロンQが優勝、リトアニアのメティスQ二位。メティスQの明快なキャラクターや、実質上三位のQペルリン東京の総合力に遜色あるとは感じられず、客席の室内楽関係者らは戸惑いを隠せなかつたことも事実だ。まだ学ぶべきことが多々ありそうな団体へのグランプリ授与を将来性への期待と割り切れれば、ひとつの見識ではある。

八月最終週には、三年毎にカナダのバンフ芸術センターが主催する国際大会が開催された。最寄り空港からでもバスで二時間、都市と隔離され



バンフは参加団体全員に何らかの賞が与えられる。バンフに招聘されただけで、もうキャリアとなるのだ。

た大自然に設置された芸術センターに、若手弦楽四重奏や審査員、音楽ファン、室内楽主催者が集まり、二週間の合宿生活をするような極めて特徴的の大会である。世界のどこからも遠隔地のため、大阪やメルボルン同様に主催側が参加団体の渡航経費を全額負担、招聘されれば経歴に記せるステータスを有する大会だ。

元ハンガリーQのセーケイとカナダ人ロルストンが創設し弦楽四重奏教育のメッカと



バンフ大会初日朝、センターに宿泊する一般聴衆が集会室に集まり、シフマン監督と数学者から採点方法のブリーフィング。

重奏ショーケースの赴きも呈する。

後述のミュンヘンARDと日程が重なった今回、北米拠点でない団体は、Qベルリン東京、英国のカスタリアンQ、それにQエクセルシオ以来十五年ぶりの日本からの参加を許されたQアルバのみ。この大会

の審査システムは特徴的で、審査員間の議論は禁止され、出された素点を総監督シフマンが複数数学者の協力を得て合評、結果を出す。参加十団体はそれぞれ三回の演奏を行い、本選は三団体。ここでもまた、第八回大阪三位のヴェローナQ（旧ヴァスミス）ら完成した団体が残らず、客席を驚かせる。

ボルドーで特別賞だったカナダのロルストンQの優勝に、地元聴衆の安堵感が漂った。なにしろバンフ・センターの礎を築いた人物の名を冠する期待の若手だ。この大会で優勝し国際的キャリアを始めたセントローレンスQ創設メンバーだったシフマンの監督就任後は、後継団体の育成という指向が顕著だっただけに、「彼ら



優勝したアロドQが、コリーナ・ベルチャ審査員に祝福される。

はバンフ・センターが責任を持つて育てる」という決意表明と考えるべきなのであるか。ちなみにこの大会、本選進出能わぬ団体全てに賞金付きのキャリア・デベロップメント賞が授与されている。

◆ミュンヘンとジュネーヴのキラクター性への評価

カナディアン・ロッキーが盛りあがっている週末の九月二日を初日に、ミュンヘンARD国際コンクール弦楽四重奏部門が開催された。二十世紀には「優勝させない大会」と敬遠すらされたが、可能な限り優勝を出すべしという通達が審査員団にあった今世紀初頭からは、四年に一度のペースで開催される弦楽四重奏部門でも

順調に優勝団体が出ている。ドイツ名門オケへの登竜門とはならぬ室内楽カテゴリーだが、欧州拠点の団体には未だ高い目標だ。今回も、ボルドーで結果の出なかった経験豊富な欧州勢が参加、九団体で争われた。

本選には性格がまるで異なる三団体が並び、フランスのアロドQが優勝。ボルドーでは本選に進めなかった、堅実で明快なフランクフルトのアリスQが二位となる。日本からはウエイブルズQ以来の参加となったQアマビレは、美しい響きと高度な合奏技術を聴かせるも、先輩と同じ三位に留まった。

アロドQは、昨今のフランスで流行する歴史的演奏を踏まえつつ大胆な解釈で古典を処理する団体。モーツァルトの二短調は極めて面白いが、本選のベートーヴェン後期では説得力不足は否めない。審査員団内でも評価は割れ、ベルチャや元エベヌQのヘルツォークら若い審査員らの意見がピヒラー審査委員長を動かしたとも。

ラッシュを締め括るのは、十一月二十日から二十七日に開催

されたジュネーヴ国際コンクール弦楽四重奏部門。コンクール黎明期の一九三九年に始まり大戦中も開催されたこの大



ジュネーヴ大会予選会場は伝統ある音楽院のホールだ。立って演奏するヴィジョンQ。

会、一九四一年の弦楽四重奏部門初回は史上最古だろう。その後は散発的に開催されたものの、一九七七年以降は同じ湖に面した隣町エヴィアンで国際大会が始まり、弦楽四重奏は休止となる。エヴィアン大会がボルドーに移った後の二〇

〇一年に復活、五年毎に開催されている。過去には第六回大阪で三位となったガラテアQが入賞、レツジョ・エミリアで優勝を逃したQヴォーチェや、前回ミュンヘン優勝アルミダQもここで優勝を経験している。

バンフとミュンヘンの参加団



ジュネーヴ本選のヴィクトリア・ホールもこの街のシンボル。

ストンQもキャンセル。それでも若手中心に九団体が参加した。結果はドイツのヴィジョンQが圧勝。セミファイナル課題曲の前年作曲部門で優勝した大阪の藪田翔一作品以外は、全て暗譜で立つて演奏する。極めてアグレッシブな音楽は若い聴衆にも大きくアピールした。ミュンヘン優勝のアロドQと性格は違えど、しかめっ面をした弦楽四重奏団像を打破せんとする意欲は共通している。そんな挑戦を評価する審査員団も、今のヨーロッパの潮流であろう。

第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの概要



2017.5.13 [土] ▶ 21 [日] 会場: いづみホール
 披露演奏会 (大阪) 22 [月]: いづみホール (東京) 23 [火]: トッパンホール

阪で開催記者発表が行なわれ、関西及び東京の新聞・音楽雑誌記者延べ三十三名が出席。冒頭、挨拶に立った森コンクール会長から、「今回は二百三十九団体と言う過去最多の応募の中から十四カ国三十六団体のハイレベルの参加団体を選ぶことができました。世界一を競う音楽イベントとなることを期待しています。」と開催に向けての抱負が語られました。



域から百四十七団体の応募があり、予備審査の結果十八団体が参加します。今回の主な改正点としては、コンクール第一部門「弦楽四重奏の部」には、素晴らしい曲が多いことから、三次予選を初めて加えて、自由選択曲で競い合うこととしました。又、聴衆審査が特徴のフェスタでは、トーナメント方式で三回勝ち抜いた団体が優勝できるように改正しました。更に初めての試みとして、堤審査委員長、M・ルティエク審査委員、クアルテット・エクスセルシオ(第二回大会準優勝)が出演するスペシャルコンサートを開催します。「華麗なるクインテットの世界」と題し、本コンクールならではの特別演奏会として、室内楽フアンの皆様に五重奏の名曲を楽しんで頂く機会を設けました。

カ国・地域から九十二団体の応募があり、予備審査を通過した十八団体が参加します。コンクールと同時開催の「大阪国際室内楽フェスタ」は、年齢制限や課題曲のないコンクールで、楽器の種類や編成は自由です。このため西洋のクラシック音楽はもとより、世界各国の民族音楽のアンサンブル(二名〜六名)も対象になります。またフェスタの審査は、聴衆の中から委嘱された約百名の一般審査員によって行われ、従来のコンクールには見られないユニークな音楽イベントとして国際的に広く知られるようになりました。前述のR・マルコー氏は「大阪のコンクールの目玉となっていくフェスタは、楽しく、形式張らず、陽気で、思いもよらない驚きがある。どのような曲が次に演奏されるか予想がつかない面白さがある。」と評していました。今回は、世界三十二カ国地

取材して次の様に評価していただきました。「このコンクールは、日本においての唯一の国際的な室内楽コンクールであり、第一部門は、パンフ(カナダ)、ロンドン、レッジオ・エミリア(イタリア)と並び、世界四大弦楽四重奏コンクールの一つである。特に、一流の審査委員、充実した賞、優勝団体の国内約十都市の演奏ツアーと、三つの重要な要素を組み合わせた室内楽コンクールであることは注目すべきことである。」(Classical Voice North America誌 二〇一四年六月)今回は、世界二十一

今年で第九回となる「大阪国際室内楽コンクール」は、一九九三年から三年毎に開催してきました。このコンクールの目的は、室内楽に取り組み若い優秀な音楽家を広く世界に求め、優れた演奏を顕彰するとともに、国際交流を促進することです。今回は第一部門が弦楽四重奏、第二部門は管楽アンサンブル(木管五重奏、サクソフォン四重奏、金管五重奏)の二部門で開催いたします。世界各国で音楽コンクールを取材しているカナダの音楽ジャーナリスト、ロバート・マルコー氏は、前回

コンクール審査委員

審査委員長
堤 剛
 Tsuyoshi TSUTSUMI
 日本/チェロ



桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋学園高校音楽科を通じ齋藤秀雄に師事。1961年アメリカに留学し、ヤーノシュ・シュタルケルに師事。1963年ミュンヘン国際音楽コンクールで第2位(最高位)、カザルス国際音楽コンクールで優賞する。これまで、ロストロポーヴィチ国際チェロコンクール、ミュンヘン国際音楽コンクールなどの審査委員を歴任。インディアナ大学教授、桐朋学園大学学長を経て、現在、サントリーホール館長、サントリー芸術財団代表理事、日本芸術院会員。2009年紫綬褒章を受章。2013年文化功労者に選出。

澤 和樹
 Kazuki SAWA
 日本/ヴァイオリン



ロン=ティボー、ミュンヘンなどの国際音楽コンクールに入賞。イザイメダル、ポルター音楽祭金メダル受賞など国際的に活躍。アマデウスQとの出会いにより澤Qを決意する。ロン=ティボー国際コンクールなどの審査委員を歴任。現在、東京藝術大学学長。

レヴォン・チリングリアン
 Levon CHILINGIRIAN
 イギリス/ヴァイオリン



英国王立音楽大学でヴァイオリンを学ぶ。1971年ミュンヘン国際音楽コンクールのデュオ部門で第1位受賞。同年、チリングリアンQを結成。2000年大英帝国勳章を授与される。現在、英国王立音楽院教授、ギルドホール音楽演劇学校教授などを務めている。

ポール・カツツ
 Paul KATZ
 アメリカ/チェロ



ジュネーヴ国際コンクールで入賞。名門フリーヴランドQのチェリストとして26年間活動し、2500回以上のコンサートにはホワイトハウスでの演奏も含まれる。2001年からはニューイングランド音楽院やパリのプロカルテットなどで後進の指導にあたる。

クロード・ドゥランゲル
 Claude DELANGLE
 フランス/サクソフォン



パリ国立高等音楽院を、サクソフォン科と室内楽科を首席で卒業。1986年にはアンサンブル・アンテルコンタンポランの奏者に選ばれる。1992年以降はベルリン・フィルのメンバーとして活躍する。1988年にパリ国立高等音楽院の教授となり後進の指導にあたる。

神谷 敏
 Satoshi KAMIYA
 日本/トロンボーン



東京交響楽団、新日本フィルの首席奏者を経てドイツへ留学。3年間ベルリン・フィルの契約団員を務め、カッセル州立歌劇場管弦楽団の首席奏者となる。帰国後は2003年までN響首席奏者を務める。東京トロンボーン四重奏団メンバー。現在、桐朋学園大学教授。

マーティン・ビーヴァー
 Martin BEAVER
 カナダ/ヴァイオリン



インディアナ大学でジョゼフ・ギンゴールドに師事。1991年モントリオール国際音楽コンクール優勝。2002年に東京クワルテット(以下Qと略称)に第1ヴァイオリン奏者として加入し、解散までの11年間世界各地で活動する。現在、コルバーン音楽学校教授。

川本 嘉子
 Yoshiko KAWAMOTO
 日本/ヴィオラ



3歳よりヴァイオリンを始める。1991年にヴィオラに転向後、1992年ジュネーヴ国際コンクールで第2位(最高位)。東京都交響楽団首席奏者を経て、現在ではソリスト・室内楽奏者として最も活躍しているヴィオラ奏者の一人。京都アルティQメンバー。

金 昌国
 Chang-Kook KIM
 日本/フルート



日本音楽コンクール第1位、ジュネーヴ国際音楽コンクール第2位を受賞。ハノーヴァー国立歌劇場管弦楽団首席奏者を10年間務め、帰国後はアンサンブルofトウキョウを結成。現在、アジアフルート連盟名誉会長、東京藝術大学名誉教授、武蔵野音楽大学特任教授。

ホンガン・リ
 Honggang LI
 アメリカ/ヴィオラ



北京音楽院を経て上海音楽院で学ぶ。1983年上海Qを結成。1985年ロンドン国際弦楽四重奏コンクールで第2位受賞、審査委員だったメニューインに絶賛され渡米。1987年シカゴ新人コンクールで優勝。上海音楽院、北京中央音楽院の客員教授などを務める。

ミシェル・ルティエク
 Michel LETHIEC
 フランス/クラリネット



世界で最も著名なクラリネット奏者の一人で、ソロ・室内楽の活動の他、教育者として世界各国でマスタークラスを開催する。フランスのパプロ・カザルス音楽祭の芸術監督、各地の国際音楽コンクールの審査委員などを務めている。現在、パリ国立高等音楽院教授。

フィリップ・スミス
 Philip SMITH
 アメリカ/トランペット



ジュリアード音楽学校を卒業後、シカゴ響を経て、ニューヨーク・フィルの首席奏者を35年間務め、世界最高のトランペッターと称される。在任中には首席奏者からなる金管五重奏団のリーダーとして4回来日している。現在、ジョージア音楽大学教授。

ラドヴァン・ヴラトコヴィチ
 Radovan VLATKOVIĆ
 クロアチア/ホルン



弱冠21歳でミュンヘン国際音楽コンクール優勝。1982年から1990年までベルリン・ドイツ交響楽団の首席ホルン奏者を務め、以降ソリストとして世界中で活動する。レ・ヴァン・フランセメンバー。現在、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学教授。

第9回 大阪国際室内楽コンクール 出場グループ

第9回大阪国際室内楽コンクールに、世界21カ国から92団体の応募があり予備審査の結果6カ国から18団体が参加し、腕を競い合います。

コンクール 第2部門《木管五重奏・サクソフォン四重奏・金管五重奏》(10団体)



アルンドス・クインテット
(ドイツ)

2014年スペインのアントン・ガルシア・アブリル室内楽コンクールに入賞。2014年ミュンヘン国際音楽コンクールに出演。



クンスト・クインテット
(ドイツ)

2010年ドイツユースオーケストラで出会った5名の音楽家で設立。ユルゲン・ポント財団ヨリスカラーシップを受け、ドイツ全土でコンサートを行う。



アダマス・サクソフォン四重奏団
(オランダ)

2015年10月クロアチアのパパンドプロ・コンクール第2位。2016年9月クロアチアのフェルド・リヴァディッチ・コンクールで優勝。



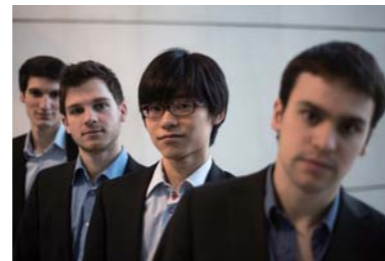
アーバン・サクソフォンカルテット
(日本)

第17回大阪国際音楽コンクール・アンサンブル部門エスポワール賞、第5回サンルート・アンサンブル・オーディションで最優秀賞と聴衆賞を受賞。



ザイー・ハ四重奏団
(フランス)

2015年パリ国立高等音楽院で結成。パリのFNAPEC国際室内楽コンクールで入賞し、フランス全土の数多くの音楽祭に出演している。



ニオベ・サクソフォン四重奏団
(フランス)

2015年に結成。シャトレ座、パレ・ド・トーキョー、ルーマニア大使館など名立たるホールに出演している。ラジオフランスにも出演。



アベックス・プラス
(アメリカ)

アリストラーホール、ニューヨーク州の最高裁判所、コロムビア大学聖パウロ礼拝堂で演奏を行う。メンバーは全員、ジュリアード音楽院に在籍中。



クインタパイル
(イギリス)

2014年ヤン・クーツワール国際金管五重奏コンクール第3位、セント・マーティン・イン・ザ・フィールドコンクール聴衆賞を受賞。



パリ・ローカル金管五重奏団
(フランス)

パリ国立高等音楽院を卒業した5名の音楽家により2015年結成。スルジュレ・プラス・フェスティバル、エスピヴァル音楽祭などに出演している。



ベルリン金管五重奏団
(ドイツ)

2012年に五重奏団を結成。指揮者のダニエル・バレンボイム氏の支援を得て、ベルリン・コンツェルトハウスの「エスプレッソコンサート」シリーズに出演。

コンクール 第1部門《弦楽四重奏》(8団体)



アイズリ・カルテット
(アメリカ)

2015年ロンドン国際弦楽四重奏コンクール(ウィグモア・ホール)第3位。2014-2016年シーズンのカーティス音楽院のカルテット・イン・レジデンス。これまでにドレスデン、パリなど国際的に活躍。



ヴィアノ・ストリング・カルテット
(アメリカ)

2015年秋にコルバーンスクールで結成し、クライヴ・グリーンズミス(東京Q)に師事。ギブソン・ダンコンサートシリーズ、ヴィラ・ガーデンセンターコンサートに出演。



ヴェラ・カルテット
(アメリカ)

2015年にインディアナ大学で結成し、パシフィカ・カルテットに師事。ペートーヴェン・ハウスに出演。2016年パンフセンターの室内楽レジデンス。インディアナ大学を代表して韓国ツアーに参加予定。



エリオット・カルテット
(ドイツ)

2014年結成しフランクフルト音楽大学でフーベルト・ビュッフベルガーに師事。2016年メンデルスゾーン音楽演劇大学コンクールで第3位、イレーネ・シュテールス・ヴィルズィング室内楽コンクール第2位。



タレイア・カルテット
(日本)

2015年ザルツブルグ・モーツァルト国際室内楽コンクール第3位。2016年第3回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第2位。イギリス湖水地方音楽祭に出演。



マクスウェル・カルテット
(イギリス)

2010年、英国王立スコットランド音楽院で結成。セント・アンズ大学やイギリス国内の音楽祭のレジデンスを務める。ウィグモアホール、パーセルルーム、セント・マーティン・イン・ザ・フィールドなどに出演。



マルメン・カルテット
(イギリス)

2015-2017年ミュージック・イン・ザ・ラウンドのキャリア・ディベロップ・プログラム受賞。パーミンガム音楽院のアソシエイト・アンサンブルに選ばれている。スウェーデンラジオやBBCラジオ3にも出演。



ユリシーズ・カルテット
(アメリカ)

2016年フィッシュボーン室内楽コンクールで優勝。同年パンフ国際弦楽四重奏コンクールでキャリア・ディベロップメント賞を受賞。シュナイダー・コンサートなどに出演し、全米にまたがり活動。

第9回 大阪国際室内楽フェスタ 出場グループ

第9回大阪国際室内楽フェスタに、世界32カ国から147団体の応募があり、予備審査の結果11カ国から18団体が参加します。

フェスタ Bグループ (9団体)



アンサンブル・フランセ
(オーストラリア)《ピアノ、オーボエ、ファゴット》
2016年結成。デビューリサイタル後も、サウス・メルボルン・タウン・ホールなどでコンサートシリーズを継続中。



タランティーノ・クアルテット
(フィンランド)《チェロ四重奏》
2014年結成。フィンランドの主な都市で公演を行う。クラシックから映画音楽まで幅広いレパートリーを持っている。



デュオ・バヤネロ
(イギリス)《チェロ、アコーディオン》
PLGヤング・アーティストに選出。ウィグモアホール、モスクワ、BBCラジオ3などに出演。



ヴェントゥス
(デンマーク)《フルート、クラリネット》
スウェーデンのルンドで開催されたオーディションに参加。ノルディック・ユース・オーケストラと共演。



エス・アンド・ビー ピアノデュオ
(フランス)《ピアノデュオ》
フランスを本拠に国際的に公演や指導活動を行う。2017年はイタリア、フランス、南アフリカなどで公演予定。



シバライト・ファイヴ
(アメリカ)《弦楽五重奏》
第8回フェスタに出場。コンサート・アーティスト・ギルド国際コンクールで、初の弦楽五重奏で入賞。



デュオ・フュンビュル
(フランス)《ピアノ、マリンバ》
2009年の初共演以来、フランス国内、ニューヨーク、レバノン、ドイツ、ブルガリアなどで公演を行う。



トリオ・オレアード
(スイス)《弦楽三重奏》
ミュンヘン国際弦楽三重奏コンクールで優勝。スイスのパーセル国際室内楽コンクールで優勝。



ニーヴ・トリオ
(アメリカ)《ピアノ三重奏》
ボストンのロンジー音楽院レジデンス。カーネギーホールやリンカーンセンター室内楽協会などに出演。



打楽器集団「男群」
(日本)《打楽器六重奏》
第8回フェスタで銅賞に受賞。2016年には北海道から岡山までのコンサートツアーを実施。



デュオ・ノスタルジア
(日本)《ギター、フルート》
2016年に結成し宗次ホールで結成記念コンサートを行う。パリや東京のサロンやバーなどで公演を行っている。



デュオ・プロコフィエフ・ダヴティアン
(ロシア)《ドムラ、バヤン》
2010年に結成。デュオのレパートリーは、ドムラとバヤンのオリジナル曲から、クラシックの名曲やフォーク音楽にまで及ぶ。



パッソ・アヴァンティ(ドイツ)
《バイオリン、チェロ、ギター、クラリネット(フルート)》
2016-2017シーズンは、トーンハレ、ユーログレスホールへの出演や、アジアツアーを予定。



ロシアン・ルネッサンス(ロシア)
《ドムラ、バヤン、バラライカ、コントラバスバラライカ》
2015年結成。チャイコフスキーコンサートホールなどで演奏。ロシアの民族楽器特有のジャンルだけでなく新しい表情豊かな音楽を開拓している。



わびさびアンサンブル
(日本)《ピアノ、ヴィオラ、クラリネット》
2015年に結成。日本とウラル出身によるトリオ。クラシック音楽からウラルの伝統音楽や現代作品まで取り組む。



トリオ・エクリプス
(スイス)《ピアノ、チェロ、クラリネット》
2015年オルフェウス・スイス・室内楽コンクールで第2位。アデルボーデンの室内楽フェスティバルなどに出演している。



ニュー・ピアノ・トリオ
(ドイツ)《ピアノ三重奏》
2016年にアルバム「NP3」をリリース。これまでオーストリア、ドイツ、スイス、オランダツアーを行っている。



モリンホール・クアルテット
(モンゴル)《馬頭琴四重奏》
モンゴルの文化遺産であるモリンホールを保存、継承するために活動。スウェーデン、マカオ、日本でも公演を行っている。

フェスタ Aグループ (9団体)



今年が二十四回目となったグランプリ・コンサート2016は、第八回大阪国際室内楽フェスタでメニューイン金賞を受賞したポーランドの「ザ・スリー・エックス」が参加し、十二月二日から十一月二十日の日程で鳥取市をスタートして全国十会場を公演を行いました。三年前、彼らがメニューイン金賞を受賞した時は、ダスクライネ・ウィーントリオと名乗っていました。フェスタの優勝を機に、三人でこれから世界進出を果たす決意で改名したという事です。

昨年は毎年グランプリ・コンサート開催して頂いている地域に加えて、東日本大震災から五年目にあたることから、岩手県・陸前高田市の地域女性団体協議会の皆さんと共同主催という形で初めて公演を開催しました。招待公演として事前に配布された整理券は、わずか一時間で無くなる程の反響がありました。当日も陸前高田市を中心に幅広い年齢層の皆様に来場頂き、コンサートは大変盛り上がりしました。また、昨年四月に発生した熊本地震の震源地近くの「益城町文化会館」は、毎年熊本公演を開催して頂いている会館ですが、昨年九月まで正式にコンサートが出来るかどうかわからない状況の中、会館や後援のKKTくまもと県民テレビのご尽力により、無事コンサートを開催する事が出来ました。そしてザ・スリー・エックスも、町の皆様に笑顔を届ける為、演奏とパフォーマンスでその役割を果たしてくれました。

グランプリ・コンサート2016 全国公演日程

「ザ・スリー・エックス」(旧ダスクライネ・ウィントリオ)
「第8回大阪国際室内楽フェスタ」メニューイン金賞 受賞団体

日時	公演名	会場
11月2日(水) 18:30	鳥取公演	鳥取ふれあい会館
4日(金) 18:30	広島公演	庄原市民会館
6日(日) 14:00	熊本公演	益城町文化会館
8日(火) 14:00	大分公演	由布市立 由布院小学校
10日(木) 18:30	陸前高田公演	シンガポールホール
12日(土) 14:00	大阪中之島公演	中之島公会堂 大集会室
13日(日) 14:30	三重公演	三重県文化会館 小ホール
15日(火) 13:30	大阪公演	いずみホール
17日(木) 19:00	高岡公演	高岡文化ホール
20日(日) 19:00	東京公演	トッパンホール

(全国)
主催:公益財団法人 日本室内楽振興財団
協賛:大和ハウス工業株式会社
トヨタ自動車株式会社
助成:公益財団法人ローム ミュージック ファンデーション
協力:野村證券株式会社



選ばれ、今年秋からのグランプリ・コンサートが始まります。グランプリ・コンサートの二つの楽しみ方として、まずは五月の第九回コンクール&フェスタにお越し頂き、さらに優勝団体として凱旋するグランプリ・コンサートでの彼らの演奏をお聴き頂くのも面白いと思います。これまでグランプリ・コンサートにご来場いただいている皆様も、今年五月は大阪のいずみホールまで是非足をお運びください。

「グランプリ・コンサート2016 ザ・スリー・エックス」を終えて

グランプリ・コンサート担当
柳 圭史

第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタの広報活動

室内楽振興の一環として、これまでアウトリーチやレクチャーコンサートなど様々なコンクール関連イベントを行ってきました「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」。1993年の第1回大会以降20年以上経過し、室内楽ファンも着実に増えてきましたが、更に多くの方々に室内楽の素晴らしさを知ってもらうため、コンクール開催と連動して様々な啓発活動を行います。以下の関連イベントを総称して「チェンバームュージック・ホライズン」とし、多様な形で展開いたします。

1 アウトリーチ活動

普段コンサートホールに足を運ぶことの少ない人に室内楽の楽曲や使用する楽器、アーティストに興味をもってもらい室内楽ファンを拡大する観点から、第6回大会以降、毎回実施してきたアウトリーチ活動。今回は、第7回大会で優勝したアタッカ・カルテット(アメリカ)が来日する機会に、コンクールのプレイベントの一環として実施します。

4月17日(月)	4月19日(水)	4月20日(木)
府立夕陽丘高校 (ヴィオーラ・ホール)	北野病院 (プララ・ホール)	帝塚山中学校・高校



北野病院でのアタッカQのアウトリーチ風景

2 審査委員の室内楽マスタークラス

世界的な音楽家が審査委員として来日している絶好の機会を活用すべく、関連イベントにもご協力いただいております。今回は、室内楽に取り組む若手演奏家(主に大学生、大学院生クラス)の育成を目的に、5月13日(土)と14日(日)、フェニックスホールで、サクソフォン四重奏(講師:クロード・ドゥラングル 審査委員)と、弦楽四重奏(講師:マーティン・ビーヴァー 審査委員)の公開マスタークラスを実施します。関西では室内楽のマスタークラスが数少なく、特にサクソフォン四重奏のマスタークラスは極めて稀なため、多くの聴講生が楽しみにしています。



M. ビーヴァー審査委員による指導の様子

3 スペシャル・コンサート

5月19日(金)の午後7時から、『華麗なるクインテットの世界』と題して、審査委員によるスペシャル・コンサートをいずみホールで実施します。出演は、堤審査委員長、ミシェル・ルティエク審査委員、そして弦楽四重奏団カルテット・エクセルシオ(第2回大会準優勝)です。演奏曲は室内楽の中でも名曲中の名曲で、どのようなクインテットの世界が展開するのか、今から楽しみです。

- F. シューベルト:弦楽五重奏曲 八長調 D.956
(演奏:堤審査委員長とカルテット・エクセルシオ)
- W.A. モーツァルト:クラリネット五重奏 イ長調 K.581
(演奏:M. ルティエク審査委員とカルテット・エクセルシオ)



堤審査委員長 © 鍋島徳泰

4 ホームページの充実とライブ・ストリーミングの実施

当コンクールは海外でも注目されるようになり、参加団体の関係者はもとより、国内外の室内楽ファンや音楽コンクールに関心のある人々にも、参加団体のキャリアやコンクールの経過がわかりやすくなるように、ホームページに、日本語版と英語版の『コンクール特設ページ』を設けました。

また、会場には来られないが演奏は聴きたいという方にも聴く機会を作りたいと考え、コンクール&フェスタの全演奏をYouTubeで、世界に同時配信します。参加団体の演奏を聴いてみたい方、どの団体が優勝するのかなどコンクールに関心のある方は、コンクールのサイト(<http://www.jcmf.or.jp/>)に是非アクセスしてください。



ストリーミングのイメージ



公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

東洋紡株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

野村證券株式会社

(関連業種別50音順)

C O N T E N T S

インタビュー	第9回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」
「第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催によって、	概要 13
さらにクラシック音楽界が盛り上がり、	コンクール審査委員 14
日本全体の活性化につながることができれば素晴らしい!	出場グループ 第1部門 15
出席者:堤剛・尾高忠明 インタビュアー:牧野立太.....1	出場グループ 第2部門 16
金管五重奏の歴史とその魅力	出場グループ フェスタ部門 17
古楽器演奏家・音楽評論家 佐伯茂樹7	広報活動 19
平和な祝いの日のために	「グランプリ・コンサート2016 ザ・スリー・エックス」を終えて
—大阪国際室内楽コンクールの意義	グランプリ・コンサート担当 柳 圭史 20
藤野一夫9	JCMF NEWS 21
2016年国際弦楽四重奏コンクール総括	公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業 22
～ポルドー・バンフ・ミュンヘン・ジュネーヴ～	
渡辺和 11	

表紙は「第8回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」
第1部門で優勝したアルカディア・クアルテット

平成28年度 第2回理事会開催



理事会

平成28年度第2回理事会が、2017年3月8日(水)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の冒頭、森会長の挨拶があり、その後、望月理事長が議長となって、基本財産の一部を一般正味財産へ振替の件並びに平成29年度事業計画書及び収支予算書が承認され、続いて平成28年度臨時評議員会招集の件が可決承認されました。この後基本財産による株式購入の経緯が報告され、会議の終わりに堤剛音楽理事より第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタへの所感が述べられました。

平成28年度 臨時評議員会開催



評議員会

平成28年度臨時評議員会が、2017年3月28日(火)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。会議の初めに望月理事長の挨拶があり、その後評議員の互選で牧野評議員を議長に選出して、先の理事会で承認された基本財産の一部を一般正味財産へ振替の件並びに平成29年度事業計画書及び収支予算書が審議され、可決承認されました。また、評議員3名の選出についても可決承認されました。この後基本財産による株式購入の経緯が報告され、会議の終わりに梅本俊和音楽評議員から第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ開催に向けての期待と展望が話されました。

なお、新たに選出された評議員は次の方々です。

評議員 河村 達樹(きんでん)
大江 謙(電通)
野邊 正彦(日建設計) (敬称略、企業名50音順)

平成29年度助成金交付予定事業決定

平成29年度の助成金交付事業は1月30日(月)の選考委員会で厳正な審議の結果、申請総数25件のうち対象外を除く22件から下記の9件が選考されました。

	事業名	申請者	開催地
1	アトリオン国際室内楽アカデミー2018	厚生ビル管理株式会社	秋田市
2	イリス弦楽四重奏団 in 太郎吉蔵	NPO アートステージ空知 理事長 青木 勝美	北海道滝川市
3	月見の里室内楽アカデミー2017	袋井市月見の里学遊館 館長 根津 幸久	静岡県袋井市
4	シヨスタコーヴィチの自画像IV、V	古典四重奏団 田崎 端博	東京 近江楽堂
5	いわき室内楽協会コンサート2017/2018	いわき室内楽協会 代表 九里 孝雄	福島県いわき市
6	通崎睦美コンサート	通崎 睦美	京都市 京都文化博物館
7	ICEP2017日本 訪問プログラム 報告コンサート	特定非営利活動法人ミュージック・シェアリング	大阪・東京
8	コロネット室内楽シリーズ「アンサンブル天下統一2017」	SPS・岡崎市シビックセンター	愛知県岡崎市
9	SQSベートーヴェン・サイクル2017	横浜楽友会 代表 平井 満	横浜市鶴見区 サルビアホール

〔選考委員〕 委員長 藤田 由之 (指揮・評論)
委員 青澤 隆明 (評論)
委員 小野寺 昭爾 (大阪フィルハーモニー協会)
委員 三宅 幸夫 (慶應義塾大学)
委員 横原 千史 (評論) (敬称略、委員名50音順)

活力溢れる生命の息吹が、 オーケストラのように響き渡っている。

鮮やかなブルーの空、爽やかで心地よい風、生き生きとした動植物。
雄大な自然のパノラマビュー。

あちらこちらから聞こえる生命の息吹、
まるで自然のオーケストラのようだ。

「新たな発見・感動探しに、一步踏み出してみませんか？」

私たちJTBは、世界各地の癒しスポットをご案内し
旅のお手伝いをいたします。

JTB西日本 海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 (MPR本町ビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:有野 良一

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail zaidan@jcmf.or.jp